

卑弥呼に下賜された金八両の意味

— 漢魏代の黄金使用との相關的検討 —

門田 誠一

〔抄録〕

魏志倭人伝記の記述のなかでも、もっとも史料性が高いとされるのが魏の皇帝から卑弥呼に与えられた詔書の部分であり、ここに記された下賜品のうち「金八両」に関して、漢魏における金の使用のなかで把握するとともに、具体的な斤量を推定した。あわせて、文献・史料と出土遺物の双方から金製品を多数かつ多量に用いた匈奴と比して、考古資料からも金の使用が顕著でない倭に対しては、魏から少量の金しか与えられておらず、金の下賜に関する倭と匈奴との相違を示した。これらによって、漢代から三国

時代にかけての金使用の衰退とあわせて、卑弥呼に対する黄金の下賜は漢代以降の中国における賜金を主体とした金使用の変化に対応しており、さらには金を重用しないという倭の具体的な習俗を認知したうえで行われた魏の現実に即した賜物であったと結論した。

キーワード 魏志倭人伝、卑弥呼、金八両、魏、賜金

序言

魏志倭人伝と通称かつ略称される『三国志』魏書東夷伝倭人条（以下では魏志倭人伝と略称）は、邪馬台国をはじめとした倭の国々の位置比定ではじまり、倭の風土や風俗・習慣などの記述があり、後半は倭の魏に対する遣使とそれに対する魏側の対処が記される。筆者はこ

のような構成は東夷伝ひいては『三国志』編纂における倭人伝の意味と位置づけを顕現するものと考えているが、そのことを論じるためには魏と倭の交渉記事の個別的な検討によらねばならない。

魏志倭人伝の記述のなかでも、もっとも史料性が高いとされるのが魏の皇帝から卑弥呼に与えられた詔書の部分とされる。その根拠としては漢代以降においては節略されることのある「制詔」の語がみえる

ことがあげられ、『三国志』を編纂した陳寿がこの部分を記すにあたって確実な史料をもとにしたと推定されている。^①このような見方に瑕疵がないならば、魏志倭人伝のなかでも解釈の入る余地がなく、そのために下賜品の種類や名称のみならず、数量に関しても正確であり、これによって実物資料である出土遺物や遺構などとの比較検討のもつとも有効な対象となるのである。加えて、魏志倭人伝の編纂時期と同時代である魏晋代および制度や文化において相当部分の継続性が想定される漢代とりわけ後漢代の考古資料は豊富であり、かつ文献・史料も備わっている。これらのことから魏志倭人伝に記された魏による卑弥呼への詔書に記された下賜品の種類や数量については正確であり、さらにそれらに関する史・資料による同時代的な位置づけが可能となる。そしてこのような検討によって、下賜品の同時代的意義の復原による魏の卑弥呼に対する国際的、外交的意味も検証できる。さらに具体的には魏が邪馬台国に下賜した物品の同時代的な価値観と、それらを通じた当時の国際交渉における対外的認識の復原によって魏の倭に対する立場または『三国志』編纂における倭に対する理解に近づくことが可能となる。本論ではこのような視点と研究方法によって、魏が倭に下賜した品々に対する同時代的な政治・社会的価値や文化的認識の個別具体的な検討の一環として金を取り上げる。その理由として金は漢代には下賜品や交換価値をもつものとして重用された貴金属であり、それが三国時代においてどのような価値観のもとで倭に下賜されたかが、通時的な金の変化のなかで相関的に把握できると考えたためであり、先学の研究に導かれつつ以下ではこのような観点か

ら考察をすすめていきたい。

一 卑弥呼に下賜された金

魏志倭人伝にみえる倭に対する金の下賜は景初二年（二三八）十二月に魏の皇帝曹芳の倭の女王に詔書を与えるに際してなされたと思われる。^②詔書の内容は帯方郡の太守の劉夏が、倭国の大夫難升米、次使都市牛利に役人を同行させ、献上した男の生口四人、女の生口六人、班布二匹二丈とともに送り届けてきたことに対し、はるかに遠くから遣使貢獻による忠誠心を賞し、倭の女王を親魏倭王となし、金印紫綬を装封して帯方郡の太守に託して授与するので、その内容を確かめて受領し、努めて孝順を命じたものである。そして、時にあたって遣使した難升米を率善中郎将に、牛利を率善校尉に任じ、銀印青綬を授け、面接してその労をねぎらい送り返した際に与えた内容として「絳地交龍錦五匹・絳地芻粟野十張・青絳五十匹・紺青五十匹・答汝所献貢。直又特賜汝紺地句文錦三匹・細班華野五張・白絹五十匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠鉛丹各五十斤」があり、さらに「皆装封付難升米牛利還到錄受悉可以示汝国中人使知国家哀汝故鄭重賜汝好物也」とあり、これらの賜物を装封して難升米、牛利に持たせ汝に与えるので、倭国に帰還したならば記録と照合して受取り、全ての品を汝の国中の人々に公示し、魏皇帝が汝を哀れんでいることを人々に周知せしめ、ここに汝すなわち倭の女王に好き物を鄭重に選んで汝に下賜するものである、と記されている。そして、正始元年（二四〇）には

太守弓遵が建中校尉梯儁等を遣わし、詣書・印綬を奉じて、倭国に詣り、倭王に拝仮し、ならびに詣を齎し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜い、倭王は使に因つて上表し、詣恩を答謝したとみえる。^③これは先の詔書の下賜品を実際に倭に与えたことを示すものと考えられる。^①

詔書にみえる下賜品は布地などの織物が主体となっているが、考古学的に検討されてきたのが銅鏡百枚であつて、金属素材としては金八両があり、金属製品としては、この銅鏡と五尺刀二口のみであることがあることが注目される。

また、正始元年（二四〇）に帯方太守弓遵が建中校尉梯儁らの倭国に派遣に伴う金帛・錦罽・刀鏡・采物などの下賜品のうち、刀鏡は刀と鏡を指すから、金帛は金と帛を指すとみて間違いなく、前回に続いて賜金がなされていることがわかる。

倭人伝にみえる魏からの二度の賜金について、これまでの言及は極めて少なく、管見では三品彰英氏が『漢書』律曆志を引用し、金八両の重量について、黄鐘をみたす中くらいの黍千二百粒の重さを十二銖、二十四銖をもつて一両とすると解説していることがあげられる程度である。^⑤

また、佐伯有清氏は金帛以下の物品は詔書にみえる倭の女王卑弥呼への下賜品に相当するとし、金は詔書中の「金八両」、「帛」は「しろぎぬ」のことで詔書に記されている「白絹五十匹」にあたるとする。^⑥

いっぽう、中国では戦国から秦漢代にかけて金の使用が盛んであり、とくに前漢代を中心として皇帝が臣僚や蛮夷などに対する金の下賜が頻繁に行われ、これらは歴史用語として賜金と称されている。このよ

うな賜金も後漢代以降に衰退するが、わずかではあるが行われた。倭人伝の金の下賜もこのような賜金として行われたのであり、その位置づけのために次に漢代から魏代にかけての賜金の研究を概観するとともに、史料・文献の事例をみておきたい。

二 漢魏における金の使用

前漢代における黄金使用に関しては基礎的研究が確立されており、その嚆矢たる馬非百氏をして「黄金世界」の語を用いさせている。^⑦すなわち、馬氏は『漢書』にみえる記事によつて、皇帝が臣僚等に金を下賜するいわゆる賜金の一覧表を作成した結果、多い場合には一回で数十万斤に達する前漢代の黄金使用に関して、いみじくも燦爛として目を奪う黄金世界と評したのである。そして、賜金は後漢代になると減少し、後漢代約二百年間の賜金記事はわずかに十一例にとどまり、その量は梁皇后への二万斤や賈貴人への千斤などの皇妃への賜金を除くと、臣僚の場合は三十斤（朱祐）^⑧から二百斤（寶融）^⑨にとどまる。このような後漢における金の使用の減少をもつて馬氏は「黄金世界の没落」と称し、その原因として、後漢代以降は銀およびその他の種々の物品が黄金に取って代わり、とくに銀は民間においても有用であったが、賞賜や贈物には多用されず、史料からその例をひいて、布帛や甚だしくは牛羊などが賞賜や贈物に用いられたと述べている。

その後、彭信威氏は前漢代と後漢の賜金に対して、統計的な分析を行い、前漢代の史料に現れた黄金の下賜量の総計は九〇万斤すなわち

現在の二七六三三五キログラム、後漢代では総計二万一七四〇斤すなわち五五六五キログラムと算出した。^⑪ただし、これらは国家的な次元での賜金であり、とくに前漢代には後述するように匈奴に対する莫大な賜金が行われており、個人に対する賜金とは次元を異にする状況が前提となっている。

前漢代における黄金の支出については杜勁松氏によつて類型化されており、それによると、（一）賞賜の支出（二）聘后の費用（三）神仙祭祀に対する支出に大別されている。さらに金を賜与する一義的な機能としての賞賜の支出に関しては①諸侯王や列侯に対する定期的賜金②善言・嘉行や優秀な技芸に対する賞賜としての賜金③報酬以外の功労的賜金④大官退任時の賜金⑤大臣卒後の賜金⑥嬖幸（寵愛する女性）に対する賜金⑦天子の即位と崩御・立皇后・立太子および祥瑞・災異の発生に際する賜金⑧巡行の際の民に対する賜金⑨外征に際する賜金に分類している。^⑫

また、戦国秦漢代の黄金使用に関する研究において用途としては軍功褒賞・官吏退職金・対外国交易・対外国賜与などに用いられ、並行して用いられた銭貨や布帛とは用途が異なり、それらは相互に代替されないものであり、経済的流通手段であるのみならず、各々独自の社会的機能を有していたことを意味することが強調されている。^⑬このような研究で大別された賜金の類型を参考として、各々の典型的な内容を以下に整理し、倭人伝の賜金に関する後段の考察に資したい。

史料にみえる個人に対する賜金の多量な例としては広陵歴王胥・周勃などが五千斤を賜っている。^⑭そのほかにも黄金千斤・五百斤などの

賜金がなされているが、二百斤・百斤を賜う場合が多い。^⑮ただし、これらは前漢の国内的次元あるいは内政的意味をもつ賜金であつて、これ以外にみえる匈奴を主とした蛮夷に対する賜金が、倭人伝にみえる金の下賜を考察する場合には参考となろう。たとえば前漢の元鳳三年（紀元前七八）に張掖の属国の千長義渠王はその騎士が匈奴の犁汗王を射殺したため、黄金二百斤と馬二百匹を賜り、よつて犁汗王に封ぜられている。^⑯

甘露三年（紀元前五一）には呼韓邪单于が正月の朝賀に際して来朝し、藩臣を称して朝謁した際に宣帝は冠帯・衣裳・黄金璽・盤綬・玉具劍・佩刀や安車などの車馬および珍奇な織物などともに黄金二十斤を下賜した。^⑰

始建国三年（一一）に西域都護・但欽の上書に対して、王莽は十五人の单于によつて匈奴を分立させようと考え、呼韓邪单于の諸子を招き寄せた時に、やつて来たのは右犁汗王の咸とその子の登と助の三人で、これを脅し、咸を拝して孝单于とし、安車・鼓車各一、黄金千斤、雜繒千匹、戲戟十を賜い、助を拝して順单于とし、黄金五百斤を賜与したなどである。これを聞いた烏珠留若鞮单于は激怒し、兵を用いて雲中に侵入して大いに吏民を殺させ、ここにおいて呼韓邪单于以来続いた漢との和平は決裂した。^⑱

主な事例をあげたが、匈奴に対して漢王朝は刀劍や繊維製品とともに黄金を下賜している点は魏の卑弥呼への下賜品と共通する一方、匈奴への下賜品には馬や車馬などがあることが倭とは異なり、この点については後述する。

いっぽう、『三国志』にも臣下等に金および銀などを賜ったことがみえている。たとえば蜀の麋竺は「祖世貨殖、僮客万人、貨産鉅億」と言われるほどの富溢を誇ったが、劉備が呂布の為に敗れる所となり、妻子を失い、軍を海西に転ずるに際して、麋竺は妹を夫人と為すよう進め、客奴二千、金銀宝貨に及ぶまでこれを資とし、劉備はそのため勢力を盛り返したと記される¹⁹⁾。

城を奪取したことに對する賞賜としては益州を平定し終わった時に諸葛亮、法正、張飛および関羽に各々五百金、銀千斤、錢五千万両、錦千匹を賜り、その他の者にはそれぞれ格差をつけて恩賞を賜与したとある²⁰⁾。三国時代および晋代には賞賜として金や銀ともに錢や布帛が与えられることが漢代とは異なる点であることが、すでにふれた先行研究で指摘されている。賞賜の他に三国時代の金に對する認識が示された史料をあげておこう。倭の遣使と時期を同じくする例として、正始年間の魏の皇帝であり、後に廢位された齊王曹芳の言葉として、金に關する内容がある。すなわち、正始元年（二四〇）三月丙寅の詔勅に、今まさに百姓は物資が不足しているのに、御府（宮中の使用の衣服などを製造・管理する管掌官）ではおびただしい金銀の雜物を製作しているのは、どういうことなのかを指弾し、百五十種の黄金および銀製品あわせて千八百斤以上を供出させ、溶かして軍事の費用にすることを命じている²¹⁾。すでにふれた黄金使用に關する研究からも後漢以降は黄金の使用が減少することが定説となつてゐるが、賜金の例や金銀の稀少性を示す例をあげた。

三 金八両の相対的斤量と価値

前漢代を中心として、金は皇帝が臣下等に對する賞賜の品目となり、下賜が盛んに行われたことは賜金の研究史ですでにふれた。個別の事例として前漢・後漢代の賜金のなかで、もっとも大量の黄金を下賜された記事としては匈奴に對する軍功によつて元朔五年（紀元前一二四）と六年（紀元前一二三）に衛青に對して、それぞれ二十余万斤と五十万余斤が与えられている²²⁾。ただし、これらは国家的な非常時に對する賜金であつて、單純に個人の事例としては扱えない。史料にみえる個人に對する賜金の多量な例としては、すでにふれたように周勃や広陵歴王胥などが五千斤を賜っている²³⁾。そのほかにも黄金千斤・五百斤などの賜金がなされているが、二百斤・百斤を賜う場合が多い²⁴⁾。

いっぽう、漢代の黄金を贈与する基準としては呉楚七国の乱を首謀した呉王劉濞が諸王に送つた書簡には、敵の大將を斬り、または捕えた者には金五千斤を賜い、万户を封ずるとし、斬り、あるいは捕えた相手によつて列將の場合は三千斤と五千斤を封じ、裨將の場合は二千斤と封二千斤を封じ、二千石の場合は千斤と封千斤を封ずる、とある²⁵⁾。ここでは敵の將の地位によつて行賞に差をつけており、その主な褒賞として金と禄をあげている。ただし記事の内容からして、普遍的ではなく当該の事象に際する一回的な基準である。

これらは前漢代の賜金記事のうち、論旨に關係する内容をあげたにすぎないが、前述したように多量の金を賜金等に用いた前漢代を経て、後漢代にいたると賜金の回数や量は著しく縮小する。その後、魏晋代

には賜金の記述はわずかにみられるにとどまる。このような金の使用の減少について、晋代を対象として下賜品には絹帛や銭貨が用いられるようになり、そのこと自体は前漢代にも行われたが、とくに晋代にいたると朝廷の賞賜として金はほとんど用いられることがなくなる反面、世上では未だ用いられていたことがつとに説かれている²⁶。

後漢代における黄金使用の減少の原因に関しては、仏教の成功による造像・造寺・写経などによる消耗、中国内の産金地の疲弊、国際貿易による外地への大量流出、王莽死後の国庫の金の民間への流失などの説が出されているが、そのいずれにも実証的には瑕疵があることも指摘されている²⁷。

これらの研究史をうけて、近年では前漢代には国家による制度的な金の循環と集中、累積が行われており、それによる国家への黄金の回流が、多量の黄金を用いていた現象として文献にみえるのに対し後漢代になり、実物経済が盛んになると、前漢代の制度的な黄金の循環、集中、累積が喪失し、賜金に代表される黄金の使用が減少するとみる²⁸。このように後漢代以降の金使用の減少については複雑な問題があり、容易に結論をみないが、その対照として前漢代の多量の賜金が位置づけられる。

このような前漢・後漢代の賜金との相関において卑弥呼の賜金を再検討してみたい。金の単位として用いられる漢代の一斤は一六両であり（『漢書』律曆志「上・權衡」）、当時の秤量基準である權のなかに前漢・新・後漢の紀年銘のある遺物が知られており、これらによる近年の研究では一斤の大約は現在の単位では前漢は約二四八グラム、新代

は約二三八グラム、後漢では約二二〇グラムとされることが多いから、これらを参照すると、卑弥呼の下賜された八両は約一一〇から一二〇グラムあまりの幅の中であつたと推定され、絶対的な重量としては思いのほか少ない。また、これと比較することによって漢代とくに前漢代の黄金の膨大な下賜が推し量られよう。

漢代の史料で両の単位が用いられ、かつ用途の知られる記述をあげてみると、淮南王劉安が謀反を企て未遂に終わり、弟の衡山王賜が捕まった際に皇帝が諸侯の連座について評議させた時の膠西王端の言のなかに非吏すなわち役人でないものについての処断として金二斤八両をもつて死罪を贖わせ、それによって劉安の罪を明白にし、臣下の道を天下に明示し、あえて再び非道叛逆の意を抱かせないようにさせた²⁹、と述べている。ここでは二斤八両すなわち約六二〇グラムの金で非吏の死罪を贖うとしており、当時の罪科における命に対する代価の認識の一端が知られる。

政治的・軍事的や状況の違いにもよるが、これらと比しても倭に下賜された金八両が蛮夷に対する下賜品としては少なく、具体的には五百千、千斤などの単位でなされた匈奴への賜金とは大きな量的な違いがあることがみてとれるのである。

四 卑弥呼に下賜された金八両の同時代的意味

ここまで述べてきたように黄金は漢代を中心として皇帝からの下賜品であることが知られ、三国時代にはとくに黄金の賜与の機会と量は

著しく減少したとされるが、曹魏においてもとくに錢貨による価値体系が理解されない蛮夷に対しては漢代以来の黄金の下賜が行われたのであり、その一班として卑弥呼に対する金八両の下賜があると位置づけられる。

そして、魏を含む三国時代には錢貨や布帛が賞賜に用いられたとされるが、倭に対しては、それらがみられず織物類や五尺刀ともに金の下賜されていることについては、漢代の匈奴に対する下賜品と共通する品目が多いことを確認した。ただし、銅鏡は匈奴に対する下賜品にはみられず、倭に対する下賜品として特に意図して選ばれたものとみられる。

前漢代の匈奴に対する賜金が多い場合は五百斤、千斤であり、少なくとも十斤が与えられていたことと比して、倭人への賜金は極端に少ないことすでに指摘したとおりである。これは倭と匈奴の金製品および鍍金などの金を使用した製品の出土傾向と関連づけられる。すなわち、現在の内蒙古自治区を中心とした匈奴の居住地域では戦国時代末頃から前漢代にはとくに動物などを主体とした文様が表現された金銀製品が盛行したことが出土資料から知られている。これらの出土金銀製品の特徴は馬・羊・鹿・虎・豹・狼やそれらを複合した動物図文で構成されることであり、これは家畜とともに肉食獣の住む草原を移動する匈奴の生活環境や文化と深く結びついているとされる。

すなわち、このような匈奴の金銀製品は史料にみえる匈奴に関する記述と関連づけて考えられている。たとえば、『史記』匈奴列伝に「五月、大会龍城、祭其先、天地、鬼神」とあり、すなわち五月に龍

城に会して、祖先や天地・鬼神を祭ると記される匈奴の祭祀と関連させて、⁽³¹⁾ 天地の祭祀が動物を含む自然に対する崇拜であり、これによって動物文を多用することを理解する見方がある。⁽³²⁾

また、金製品の盛行については『史記』匈奴列伝に武帝の元狩二年（紀元前一二一）驃騎將軍の霍去病が一万騎を率いて匈奴を討った時に休屠王が祭天の金人を得たとある。⁽³³⁾ これによると匈奴の王は黄金の像を用いて天に対する祭祀を行っていたのであり、匈奴における金製品の重要性を示す記述とされる。⁽³⁴⁾ 出土遺物との関連では内蒙古自治区・阿魯柴登遺跡で出土した金製裝飾品の羚羊形裝飾（戦国～秦漢時代）をとりあげ、その角が天に向かっていているとして、祭天に用いられたとする憶測がなされている。⁽³⁵⁾

このように匈奴地域で出した金製品は独自の意匠であることから、基本的には匈奴社会において製作されたとみられているが、さきにあげた『漢書』匈奴伝に甘露三年（紀元前五一）には正月の朝賀に際して来朝し、藩臣を称して朝謁した呼韓邪单于に対して宣帝が冠帶・衣裳・黄金璽・藍綬・玉具劍・佩刀・安車などの車馬・珍奇な織物・黄金二十斤などを下賜したという記事があり、冠帶・衣裳と黄金を含む金銀裝飾品やそれによって構成された器物・什器が匈奴に将来されたことが知られる。このような記述の出土遺物との関連では内蒙古自治区・西溝畔二号墓（戦国末～前漢）出土の動物文金製帶鈎と虎形銀製節約には漢字による重量と製作管掌所の印刻文があり、⁽³⁷⁾ 匈奴は文字をもたない点からも前記の呼韓邪单于に対する下賜品に象徴される製品そのものがもたらされたか、あるいは前漢の工人による製作とみたらう

えて匈奴への前漢の金銀製品や技術の移入が想定されている。⁽³⁸⁾このように匈奴の黄金使用の盛行に関しては考古資料と史料・文献の双方から一定の検証がなされている。

これに対し、倭人伝の記述と比較される日本列島の弥生後期から古墳前期の出土品において金製品および金銅製品などの金を使用した遺物は極めて少ない。その例としては、わずかに三雲南小路遺跡（一号甕棺墓・弥生中期後半、福岡県前原市）出土金銅製四葉座金具や地藏堂遺跡（弥生中期後半、山口県下関市）出土金銅製蓋弓帽などが知られる。⁽³⁹⁾三雲南小路遺跡出土品が棺槨などの付属品とみられ、地藏堂遺跡出土品は車馬具すなわち車輿の付属品であって、車馬のみならず馬が常用されていない弥生時代社会では考案および使用されるはずのない器物であって、この点からも中国から移入されたことは間違いない。⁽⁴⁰⁾

古墳時代前期においては、この種の舶載の金銀製品さえ顕著ではなく、地域首長などの埋葬が推定される規模の大きな古墳においても碧玉製品や中国製を含む銅鏡・鉄製武器・銅製武器などが主な古墳の副葬品となることは周知のとおりである。さらに弥生時代から古墳時代前期には日本列島内で製作された金製品・金銅製品は寡聞にして知らない。中国晋代の製品とみられる奈良県新山古墳出土帯金具や四世紀代にさかのぼる紀年金象嵌銘のある七支刀などの一部の中国・朝鮮半島からの舶載品は古墳時代前期からみられるが、これらを除くと、金製品や金銅製品などの金を使用した製品・装飾品は古墳時代中期になつて出土が知られ、後期に展開することは、金銅製耳飾り・帯金具・冠などの研究から明らかにされている。⁽⁴¹⁾

以上のように前後の時代を含めて、金八両を下賜された時期の倭国では基本的に金製品の使用はみられなかったのであり、このような風俗的状况が賜金の量に反映したものと考えられる。すなわち、史料・史料と前漢代をさかのぼる時期の出土遺物の双方から金製品を多数かつ多量に用いた匈奴には、その習俗を背景として漢王朝から多量の金が賜与されていた。これに対し、本論で述べた漢代から三国時代にかけての金使用の衰退とあわせて、考古資料から知られる実態の面からも金の使用が顕著でない倭に対しては魏から少量の金しか与えられておらず、金の下賜に関する倭と匈奴との相違は明らかである。

加えて「金八両」は「五尺刀二口」「銅鏡百枚」や「真珠」「鉛丹」や種々の織物類とともに、魏の明帝から卑弥呼への詔書にみえる下賜品のなかでも「特に汝に」賜うものと推定されており、さらに詔書の末尾には「国中の人に示」すために「国家」すなわち魏が「汝を哀れむを知らしむ可し」としてみえる賜物であり、「故に鄭重に汝に好物を賜うなり」と結ばれている。ここでは下賜品が卑弥呼にとって「好物」であることを謳っているものであり、そのなかの品目として「金八両」があることが重要である。そして卑弥呼に「好物」を賜与した魏の政治・社会的背景には漢代以来の賜金が認識されていたのである。

以上のような見方に大過ないならば、魏は漢代に盛行した賜金という史的状况のもとに倭に対する金八両の下賜を行ったのであって、かつ倭の社会や風俗・習俗・習慣に関する魏の認識にもとづいて行われ、それは倭に対して魏が臨地的な情報を得ていたことを推定させるもの

といえよう。

結語

本論では魏から卑弥呼に対する「制詔」で始まる詔書の内容から、下賜品のうち「金八両」に関して検討した。その背景として金は賜与品として漢代に重用され、膨大な量が使用されたことが知られ、匈奴などに對してなされた賜金と卑弥呼に下賜された金を相対的にとらえ、漢代から三国時代の文献・史料と考古資料の双方から考察を行った。文末に内容を摘要し、結語に代えるものとした。

まず、魏から卑弥呼に下賜された「金八両」に関する記述内容を確認し、これまでの見解を示し、重さに関する事実確認や詔書のなかで金帛以下の物品が卑弥呼への下賜品であるなどの言及がある程度で、「金八両」の語は従来、ほとんど着目されることがなかったことを確認した。あわせてとくに前漢代には皇帝が臣僚や蛮夷など對して金を下賜する賜金が頻繁に行われ、これと比較して、卑弥呼の下賜された金に関して、相対的な意味を考定することの有効性を示した。

次に先行研究に基づき漢魏代における賜金の消長を概観するとともに金使用の実態を文献・史料から例示した。すなわち、前漢代と後漢代には大幅な賜金の現象がみられることを示し前漢代の賜金は賞賜・聘后・神仙祭祀に対する支出などがあり、賞賜の支出に関してはその対象が諸侯王や列侯期への賜金や報酬以外の功勞、大官退任時・大臣卒後および天子の即位と崩御・立皇后・立太子および祥瑞・災異の発

生、外征などに際して行われることを確認した。さらに前漢代の賜金の例を瞥見し、とくに周辺諸族のなかで匈奴に對して頻繁かつ多量の賜金が行われていることを示し、その際に刀劍や織維製品とともに黄金を下賜している点は魏の卑弥呼への下賜品と共通する一方、匈奴への下賜品には馬や車馬などがあることが倭とは異なることから異民族に對する賜金として双方を比較して理解した。

魏志倭人伝と同時代の賜金として、『三国志』にも城の奪取等に對する賞賜として臣下等に金および銀などを賜ったことがみえるように三国時代および晋代には賞賜として金や銀とともに錢や布帛が与えられており、とくに錢貨の下賜が漢代とは異なる点であることが、これまでに指摘されていることを述べた。また、魏の正始元年（二四〇）三月丙寅の詔勅に百五十種の黄金および銀製品あわせて千八百斤以上を供出させ、溶かして軍事の費用にすることを命じていることに示されるように、後漢以降は黄金の使用が減少することが定説となっており、実際の記事としても賜金の例の寡少や金銀の稀少性を示した。

もとより、漢代における匈奴への対応を含め、政治的・軍事的や状況の違いにもよるが、これらの漢魏代の賜金記事と比しても、倭に下賜された金八両が蛮夷に對する下賜品としては少なく、加えて千斤などの単位でなされた匈奴への賜金とは大きな量的な違いがあることを指摘した。

以上のような同時代の中国における金使用の様相を参照しつ、金八両を下賜された時期の倭国の状況を考察すると、前後の時期を含めて基本的に金製品の使用はみられなかったものであり、このような風俗的

状況が賜金の量に反映したものと考えられる。すなわち、文献・史料と実際の出土遺物の双方から金製品を多数かつ多量に用いた匈奴には、その習俗に対して、漢王朝から多量の金が賜与されていた。これに対し、本論で述べた漢代から三国時代にかけての金使用の衰退とあわせて、考古資料からも金の使用が顕著でない倭に対しては魏から少量の金しか与えられておらず、金の下賜に関する倭と匈奴との相違は明らかである。

すなわち、卑弥呼に対する黄金の下賜は漢代以降の中国における賜金を主体とした金使用の変化に対応しており、さらには金を重用しないという倭の習俗を具体的に認知したうえで行われた同時代的な現実に即した賜品であった。

〔注〕

- (1) 大庭脩「卑弥呼を親魏倭王とする制書」『古代中世における日中関係史の研究』（同朋舎出版、一九九六年）
- (2) 周知のとおり景初二年では楽浪・带方郡が公孫氏の勢力下にあったため、これが魏の支配下に入った景初三年（二三九）の誤りとする見方がある。この議論に関しては、下記の大庭脩氏の論考で論じられているように景初二年の可能性もなくはないが、景初三年説がとられることが多いのは蓋然性の問題であり、ここでは卑弥呼の遣使は景初三年とみておくが、本論は魏志倭人伝の文章や語句を検討する目的であるため、原文どおり景初二年の表記をとる。
- (3) 大庭脩「邪馬台国論——中国史からの視点——」『古代中世における日中関係史の研究』（前掲注（1））
- (3) 関係する部分の原文をあげておく。

『三国志』卷三〇・魏書三〇・烏丸鮮卑東夷伝第三〇・東夷／倭

景初二年六月、倭女王遣大夫難米等詣郡、求詣天子朝獻、太守劉夏遣吏、送詣京都。其年十二月、詔書報倭女王曰制詔親魏倭王弥呼。带方太守劉夏遣使送汝大夫難米次使都市牛利、奉汝所獻男生口四人女生口六人班布二匹二以到、汝所在踰遠乃遣使貢獻、是汝之忠孝我甚哀汝。今以汝親魏倭王假金印紫綬、装封付带方太守假授。汝其綏撫種人勉孝順。汝來使難米牛利涉遠道路勤勞。今以難米率善中郎・牛利率善校尉假銀印青綬、引見勞賜遣還。今以絳地交龍錦五匹・絳地粟十張・絳五十四・紺青五十四、答汝所獻貢。又特賜汝紺地句文錦三匹・細班華五張・白五十四・金八兩・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠丹各五十斤。皆装封付難米・牛利還到錄受、悉可以示汝国中人、使知国家哀汝故鄭重賜汝好物也。正始元年、太守弓遵遣建中校尉梯儻等、奉詔書印綬詣倭国、拜假倭王、齎詔賜金帛錦刀鏡采物。倭王因使上表、答謝詔。

- (4) 佐伯有清『魏志倭人伝を読む——卑弥呼と倭国内乱——』下（吉川弘文館、二〇〇〇年）一二九頁

- (5) 三品彰英『邪馬台国研究総覧』（創元社、一九七〇年）一三九—一四〇頁

- (6) 佐伯有清『魏志倭人伝を読む——卑弥呼と倭国内乱——』下（前掲注1）

- (7) ここで摘要した馬非百氏の考えは下記論考によった。

馬非百『秦漢經濟史資料（四）——貨幣制度』（『食貨』三一、一九三五年）（中国語文献）

- (8) 『後漢書』皇后紀第一〇上／賈貴人及太后崩、乃策書加貴人王赤綬、安車一駟、永巷宮人二百、御府雜帛二万匹、大司農黃金千斤、錢二十万。

- (9) 『後漢書』朱景王杜馬劉傳堅馬列伝第二・朱祐進擊黃郵、降之、賜祐黃金三十斤。

- (10) 『後漢書』竇融列伝第一三
帝見鈞欽甚、礼饗畢、乃遣令還、賜融璽書曰：（中略）…今以黃金二百斤賜將軍、便宜輒言。

- (11) 彭信威『中国貨幣史・修訂版』（上海人民出版社、一九六五年）一四二—一四四頁

(12) 杜勤松「関于西漢多黄金原因研究」(『中国史研究』二〇〇三年第四期)(中国語文献)

(13) 柿沼陽平『中国古代貨幣經濟史研究』(汲古書院、二〇一一年)とくに本論と関係するのは「第六章 戦国秦漢時代における錢と黄金の機能的差異」また、同氏の「三国時代の曹魏における税制改革と貨幣經濟の質的変化」(『東洋学報』九二・三、二〇一〇年)も参照した。

(14) 『漢書』卷四〇・張陳王周伝第一〇・周勃
文帝即位、以勃為右丞相、賜金五千斤、邑万户。

『漢書』卷六三・武五子伝第三三・広陵厲王胥
後延寿坐謀反誅、辞連及胥。有詔勿治、賜胥黄金前後五千斤、它器物甚衆。

(15) 馬非百「秦漢經濟史資料(四)——貨幣制度」(前掲注(7))

(16) 『漢書』卷九四上・匈奴伝第六四上
属国千長義渠王騎士射殺犁汗王、賜黄金二百斤、馬二百匹、因封為犁汗王。

(17) 『漢書』卷九四下・匈奴伝第六四下
单于正月朝天子于甘泉宮、漢寵以殊礼、位在諸侯王上、贊謁称臣而不名。賜以冠帶衣裳、黄金璽盭綬、玉具劍、佩刀、弓一張、矢四発、戸木戟十、安車一乘、鞍勒一具、馬十五匹、黄金二十斤、錢二十万、衣被七十七襲、錦繡綺縠雜帛八千匹、絮六千斤。

(18) 『漢書』卷九四下・匈奴伝第六四下

招誘呼韓邪单于諸子、欲以次拜之。使詛出塞誘呼右犁汗王咸、咸子登、助三人、至則脅拜咸為孝单于、賜安車鼓車各一、黄金千斤、雜繒千匹、戲戟十、拜助為順单于、賜黄金五百斤。伝送助、登長安。莽封苞為宣威公、拜為虎牙將軍、封級為揚威公、拜為虎賁將軍。单于聞之、怒曰「先单于受漢宣帝恩、不可負也。今天子非宣帝子孫、何以得立。遣左骨都侯、右伊秩誹王呼盧誹及左賢王渠将兵入雲中益寿塞、大殺吏民。是歲、建国三年也。」

(19) 『三国志』卷三八・蜀書八・許糜孫簡伊秦伝第八・糜竺

祖世貨殖、僮客万人、貨産鉅億。…(中略)…先主軼軍広陵海西、竺

於是進妹於先主為夫人、奴客二千、金銀貨幣以助軍資、于時困匱、賴此復振。

(20) 『三国志』卷三六・蜀書六・関張馬黄趙伝第六・張飛

益州既平、賜諸葛亮、法正、飛及関羽金各五百斤、銀千斤、錢五千万、錦千匹、其余頒賜各有差、以飛領巴西太守。

(21) 『三国志』卷四・魏書四・三少帝紀第四・齊王芳「正始元年秋七月、方今百姓不足而御府多作金銀雜物、將奚以為。今出黄金銀物百五十種、千八百余斤、銷冶以供軍用。」

(22) 『漢書』卷二四下・食貨志第四下／貨
此後四年、衛青比歲十余万衆擊胡、斬捕首虜之士受賜黄金二十余万斤、而漢軍士馬死者十余万、兵甲輜漕之費不與焉。

『漢書』卷二四下・食貨志第四下／貨
其明年、大將軍、票騎大出擊胡、賞賜五十万金、軍馬死者十余万匹、輜漕車甲之費不與焉。

(23) 『漢書』卷四〇・張陳王周伝第一〇・周勃
文帝即位、以勃為右丞相、賜金五千斤、邑万户。

『漢書』卷六三・武五子伝第三三／広陵厲王胥
後延寿坐謀反誅、辞連及胥。有詔勿治、賜胥黄金前後五千斤、它器物甚衆。

(24) 漢代の賜金については記事の一覧表が下記論考に掲載されており、基本的にはこれにより、本論で引用した関係論文によって補綴した。

馬非百「秦漢經濟史資料(四)——貨幣制度」(『食貨』三一・二、一九三五年)(中国語文献)

(25) 『漢書』卷三五・荆燕呉伝第五・呉王濞

凡皆為此、願諸王勉之。能斬捕大將者、賜金五千斤、封万户、列將三千斤、封五千戸、裨將二千斤、封二千戸二千石、千斤、封千戸、皆為列侯。

(26) 加藤繁「隋以前及び元以後に於ける金銀」『唐宋時代に於ける金銀の研究』(東洋文庫、一九二六年)

(27) 後漢代の金使用の減少とその原因に関する諸説およびそれらに対する

批判的整理は下記論文参照。龔鵬九「西漢黄金問題の探討」（『歴史教学』一九五八年第九期）（中国語文献）

(28) 杜勤松「関于西漢多黄金原因研究」（前掲注（12））

(29) 吳承洛著・王雲五・傅緯平主編『中国度量衡史』（台湾商務印書館、一九六六年）

藪田嘉一郎編訳注『中国古尺集説』（綜芸舎、一九六九年）

中国国家計量総局主編・山田慶児・浅原達郎訳『中国古代度量衡図集』（みすず書房、一九八五年）

丘光明編著『中国歴代度量衡考』（科学出版社、一九九二年）（中国語文献）

姜波「秦漢度量衡制度的考古学的研究」（『中国文物科学研究』二〇一二年第四期）（中国語文献）

なお、上記文献においても三国時代の度量衡については不明な点が多く、ここでは漢代を参考とした。

(30) 『漢書』卷四四・淮南衡山濟北王伝第一四・淮南厲王長

膠西王端議曰：其非吏、它贖死金二斤八両、以章安之罪、使天下明知臣子之道、毋敢復有邪僻背畔之意。

(31) 『史記』卷一一〇・匈奴列伝第五〇
五月、大会龍城、祭其先、天地、鬼神。

(32) 張景明『中国北方草原古代金銀器』（文物出版社、二〇〇五年）（中国語文献）四六頁

(33) 『史記』卷一一〇・匈奴列伝第五〇

其明年春、漢使驃騎將軍去病將万騎出隴西、過焉支山千余里、擊匈奴、得胡首虜（騎）万八千余級、破得休屠王祭天金人。

『漢書』卷六八・霍光金日磾伝第三八・金日磾
武帝元狩中、票騎將軍霍去病將兵擊匈奴右地、多斬首、虜獲休屠王祭天金人。

(34) ただし、この金人を『史記』始皇帝本紀にみえる金人と同じ種類の銅製品とみる説もある。白鳥庫吉「匈奴の休屠王の領域と其の祭天の金人」とに就いて」（『白鳥庫吉全集』第五卷（岩波書店、一九七〇年）

(35) 田広金・郭素新「内蒙古阿魯柴登發現匈奴遺物」（『考古』一九八〇年第四期）（中国語文献）

(36) 張景明『中国北方草原古代金銀器』（前掲注（32））（中国語文献）四七頁

(37) 伊克昭盟文物工作站・内蒙古文物工作队「西溝畔匈奴墓」（『文物』一九八〇年第七期）（中国語文献）

(38) 張景明『中国北方草原古代金銀器』（前掲注（32））五九頁

(39) 岡内三眞「貨幣・銅釧路その他の輸入青銅器」金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究』第六巻道具と技術Ⅱ（雄山閣出版、一九八六年）で舶載青銅器が集成された時点以降も本論で取り上げた金銅製品以外に出土例は知られていない。

(40) 門田誠一「日本出土漢代漆金車輿具の意義——山口県稗田地蔵堂遺跡出土資料の再吟味」（『文化史学』六一、二〇〇五年）

(41) これに関して概括的な論考を掲載した叢書としては石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編『古墳時代の研究』八・古墳Ⅱ副葬品（雄山閣出版、一九九一年）があり、とくに岡林孝作・松本百合子・伊藤雅文・坂靖・馬目順一「装身具」などに顕著である。

（もんだ せいいち 歴史文化学科）

二〇一五年十一月十一日受理